

鹿児島大学・共通教育科目における 稲盛アカデミー提供科目を通じた稲盛環境思想の実践と課題（１）

萩 原 豪〔鹿児島大学稲盛アカデミー特任講師〕

Practice and Issues of Inamori Environmental Thoughts through General Education Courses held by Inamori Academy, Kagoshima University (1)

HAGIWARA, Go Wayne [Senior Assistant Professor, Kagoshima University, Inamori Academy]

キーワード：共通教育、ESD（持続可能な開発のための教育）、利他、足を知る、共生

Abstract:

Inamori Academy provides general education courses at Kagoshima University. There are 5 courses for environmental issues which are provided by the Inamori Academy. The core idea of these 5 courses is based on altruism, symbiosis and "Enough is as good as a feast" which is known as the Inamori's Environmental Thought. By taking one of these five courses and participating in discussions with group members, students learn Inamori's Environmental Thought and what they should understand and act upon for the sustainable society in near future.

Keywords: general education, ESD (Education for Sustainable Development), altruism, "Enough is as good as a feast", symbiosis

１．はじめに

鹿児島大学稲盛アカデミーでは、稲盛和夫氏の「豊かな人間力をもった次世代を担う若者」を育てたいという思いを、全学的な共通教育の教育・学習目標に整合させて開講している。特に実践経験による「人間力」育成と、「地域」や「国際社会」への貢献をキーワードと、稲盛アカデミーの特色を活かした科目構成をとっている。稲盛アカデミーでは、この進取の精神による実践的人間力をめざした人材育成をするものであり、この進取の精神による人間力形成教育の授業科目は、鹿児島の文化のなかで培ってきた進取の精神を現代的に再評価し、実践的人間力の人材育成をめざすものである（神田2009:66）。共通教育への科目提供は2009年度から行っており、筆者は環境思想・環境教育に関わる分野の科目を担当している。

稲盛哲学は「人間として何が正しい行為であるか」という点に重点を置いているといえる（奥2010:81）。稲盛和夫氏は経営哲学のみならず、環境問題についても多く言及して

いる。授業科目の中で稲盛氏が述べている環境思想のすべてに言及することは、半期15回という授業の時間的にも限界がある。また稲盛哲学については、稲盛アカデミーの教員が担当している他の科目と重なる部分も多い。特に共通教育科目は大学1年生を主対象としているため、学生の経営のみならず環境に関する知識が浅いことは否めない。

そこで筆者は、担当しているすべての教科において、稲盛氏の環境思想の中でも「足を知る」「利他」「共生」という3つのキーワードに着目し、これらを授業の基軸とすることにした。そして受講生に単なる「知識」ではなく、いかにして「考え」、「実践」していくことができるかを考えてもらう授業運営を行うことを試みた。

本稿では2009年度から2011年度まで担当している科目について、共通教育の中での授業実践の振り返りを行い、課題を検討するものである。本年度は「エネルギー環境教育論」、「持続可能な開発と東洋の環境思想」、「ESDとサブカルチャー」の3科目について考察し、演習方式（ゼミ形式）で行っている「環境教育・ESD入門」については次回の考察に譲ることにする。

2. 稲盛環境思想と授業実践

筆者が担当する各科目では、授業（90分）は、基本的に前半は講義形式を主としつつ、グループワークを交えて行っている。授業の進行に伴い、グループワークの比率を高めていき、ワークショップ形式の授業に移行している。初年度（2009年度）に出席票として回収したリアクションペーパーでは、受講生は授業を通じてこれら3つのキーワードの重要性を理解してくれていることが伺えた。

授業におけるワークショップを通じて各グループでまとめた内容は、授業内でのグループ発表を最終報告としていたが、2年目（2010年度）より、かごしま環境未来館で授業合同の最終報告会を行い、この場でグループワークの最終報告を行っている。これは情報発信能力（プレゼンテーション能力）を高めるだけではなく、稲盛氏の環境思想のうち「足を知る」「利他」「共生」に関わる事項について、受講生なりに考察していった結果を広く社会に発信していくことを試みているものである（図1）。

以下、3つの科目について、それぞれ年度毎に特徴的であった実践例について取り上げ、それぞれについて考察をしていきたい。なお、各講義の詳細については、稲盛アカデミーウェブサイトに掲載されているシラバスを参照されたい。

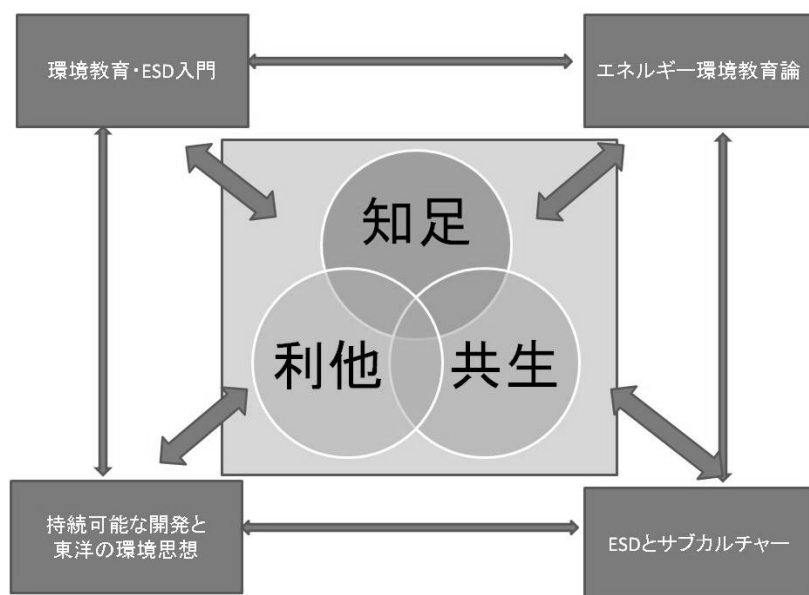


図1 稲盛環境思想と各科目の相関図（筆者作成）

2. 1 エネルギー環境教育論A／B¹

本講義（2単位）は2009年度に開講した科目であり、「持続可能な社会の構築」という視点から特に資源・エネルギー問題に着目した授業展開を行っている。2009年度は前期のみの開講としていたが、2010年度より前期・後期の通年で開講している。

2011年11月現在、日本の国公立大学で「エネルギー環境教育（論）」という名称で開講している科目は、稲盛アカデミー提供科目以外には見当たらない。これまでには「環境教育」という講義の一部としてエネルギー問題を扱っていたり、「環境とエネルギー」という講義でこれらの関係性について解説したりするものはあった。しかしながら、「エネルギー環境教育」を前面に押し出して開講するものは初めての試みであると言える。「エネルギー環境教育」について明確な定義はなされていない。山下宏文（京都教育大学教授・日本エネルギー環境教育学会副会長）は「エネルギーを軸教材にし、エネルギーに関する内容を中心とする環境教育」と定義している（山下2005）。筆者はこの「エネルギー」という箇所を「資源・エネルギー」に読み替えて講義を展開している。本稿では2009年度の「エネルギー環境教育論」の事例を取り上げたい。

「エネルギー環境教育論」では、カリキュラム全体の構成の都合から環境教育・国際理解教育・ESD（持続可能な開発のための教育）などについても触れながら、授業進行をしていかなければならない。これらの内容については授業前半の講義時間を充てて解説を行ったが、それと並行する形でグループワークを行った。毎回6グループに分けており、1グループあたり4人～5人の学生でまとまるようにしている。グループワークのテーマは、①身の回りのエコなことを考えてみる、②ミネラルウォーターって何なのさ、③身近なことから考えるエネルギー、の3つである。

まず「①身の回りのエコなことを考えてみる」では、一般に「エコなこと」と言われているものを挙げていき、それらはいったい何のために行われているものなのか、ということ話を話してもらった。その中では必ずといってよいほど、温暖化問題や大気汚染などに触れていた。グループでは、それら個々の問題群（キーワード）の関係性をイメージマップ化（図2）してもらい、それを報告してもらった。

続く「②ミネラルウォーターって何なのさ」では、水を資源問題として捉えた上で、ミネラルウォーターのボトルを教材として利用した場合、誰に何を伝えることができるのか、その企画を作成・報告してもらった。グループの中にはミネラルウォーターを製造・販売しているメーカー各社に直接連絡をし、同一メーカーで出している異なるミネラルウォーターの差異などを明らかにするなど、学生たちは積極的に動いていた。企画の実現可能性が高いものについては、現在、実現に向けて各所に働きかけているところである（図3）。

最後のテーマである「③身近なことから考えるエネルギー」では、①と②を通じて発見した身近な資源・エネルギー問題について、特に石油や電力などに着目し、鹿児島大学の学生に対して何かを伝えて、気づいてもらい、行動してもらおう、という企画を作成してもらった。

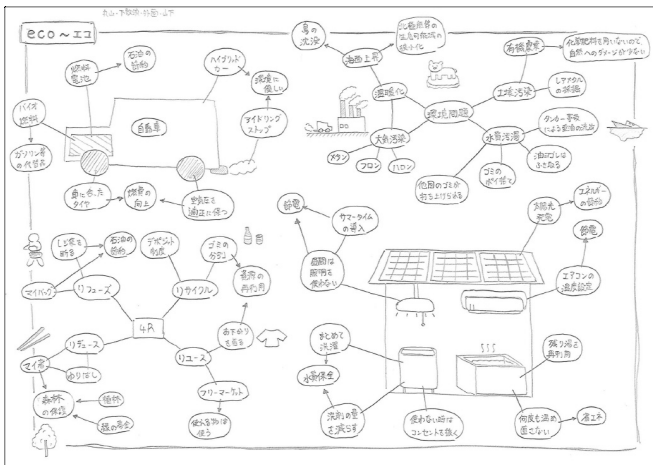


図2 「身の回りのエコなことを考えてみる」イメージマップ（左）



図3 「ミネラルウォーターって何なのさ」グループ発表の様子（右）

2. 2 持続可能な開発と東洋の環境思想

本講義（2単位）は2009年度に開講した科目であり、後期のみ開講している。「持続可能な開発」（Sustainable Development）という言葉が国際的に使われるようになってから約30年が経過しており、現在まで地球環境と開発を巡る問題については「持続可能な開発」という考え方を採用することが多くある。しかし、この言葉の共通認識はあるものの、その定義はいまだ定まっていない。他方、東洋社会には伝統的に「人間は自然との関係性の中で生きている」という「持続可能な開発」に深く関連する環境観が存在している。東洋社会では、人間の利益を絶対的に考えるのではなく、自然生命の固有価値のなかに人間の生存を見出しており、日本における自然崇拝もこの事例のひとつと考えることができる。

本講義の基軸としている稲盛和夫氏の環境思想は東洋思想によるものが多いことに特徴がある。

「持続可能な開発と東洋の環境思想」では、「持続可能な開発」と「東洋の環境思想」という大きなテーマを1つの授業科目内で扱っている。それぞれで独立した授業科目にもなるくらい幅広い内容を扱うことができるため、学生が混乱せず理解することを考慮し、授業の前半で「持続可能な開発」を、後半で「東洋の環境思想」を、それぞれ分けて説明するようにしている。2009年度の受講生は70名近くいたためにワークショップ形式をとることが難しく、そのためできるだけ身近な問題を取り上げて周囲の人たちと意見交換を行うという形式をとるようにした。例えば、後期開講時に鹿児島県で話題のひとつになっていた、薩摩川内市祁答院町にある藺牟田池の渇水問題について取り上げた。



図4 渇水時の藺牟田池

図4.1 泥炭形成植物群落の近くまで水が干上がっているのがわかる

図4.2 図4.1の対岸の状況、池底が露出しひび割れている

(2010年1月17日 筆者撮影)

藺牟田池は独自の湧水源を持たず、周囲から流れてくる雨水や地下水が溜まってできた火山湖（カルデラ湖）である。藺牟田池西側の湿原は、国内希少野生動植物種であり、環境省レッドリストに絶滅危惧Ⅰ種として登録されているベッコウトンボの生息地であることから、2005年11月にラムサール条約（特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約）に登録されている。しかし2009年夏の雨不足により、藺牟田池に流れ込む水が激減したため、藺牟田池が干上がる事態に陥った（図4）。地中に生息しているベッコウトンボの幼虫（ヤゴ）を守るため、薩摩川内市消防局が放水を行うなどしていた。その反面、藺牟田池の水は近隣の農業用水としても使われており、異常渇水の事態であっても水量を減らしているものの、水門が閉じられることはなかったのも事実である。「持続可能な社会」のために絶滅危惧種を保護するのか、生活基盤である農業を維持するのか、という二者択一の状況は稲盛環境思想の中でも「共生」という点を考えるのに大きな事例となった²。

2. 3 ESDとサブカルチャー

本講義（2単位）は2010年度から開講した科目で、前期のみ開講している。環境問題について考えるとき、学生にとってより身近な話題を用いることが効果的な「気づき」を与えうることに着目し、サブカルチャー作品を題材にして授業展開をすることを試みた。

予想した通り、本講義に対する学生の関心度は非常に高く、2010年度は自動抽選になったが、2011年度は授業初回でのガイダンスで授業内容を説明した後、受講希望者が多い場合に抽選するという方式をとった。150名を超える受講希望者がいたが、ワークショップ形式ということで35名の受講制限を行う予定であったが、受講希望者が多すぎたため受講生と相談の上、受講者制限数を増やして55名を抽選で選拔し、授業を行った（うち社会人受講生1名を含む）。

本講義では最初にスタジオジブリが制作したショートフィルム『On Your Mark』（1995）を取り上げ、サブカルチャー作品の中にある世界観と現実の世界の相違について比較をし、作品中に投影されている思想やモノ・コトについて議論を行った。この『On Your Mark』はCHAGE and ASKAが1994年に発表した楽曲『On Your Mark』のプロモーション・フィルムであるが、歌以外の台詞は一切ないため、アニメーションの中に描かれている世界観がどのようなものであるかは、視聴者によって受け取り方が大きく異なるという特徴がある。各受講生が作品を鑑賞して気づいたことや、受け止めたことについて、グループワークを通じて共有していった（図5）。この作品を通じて受講生たちは、作品の受け止め方や考え方は、受け手によって大きく異なることを確認することができたと言えよう。



図5 「ESDとサブカルチャー」授業風景

図5.1 『On Your Mark』に関するグループワークの発表会

図5.2 あるグループがまとめた『On Your Mark』から考える世界観マップ

また、2010年度の講義は、稲盛アカデミー協力教員である野村卓・本学産学官連携推進機構特任准教授（かごしまルネッサンスアカデミー健康環境文化コース 主任研究員）を共同担当教員として開講していた。野村准教授には、特に食糧問題に関わる内容を担当

していただき、筆者が環境問題・エネルギー問題・水問題などの内容を担当した。野村准教授の異動に伴い、2011年度は筆者が全般を担当した。

3. 今後の課題

稲盛環境思想の中にある「足を知る」「利他」「共生」という3つのキーワードを基軸として授業展開を行ってきた。各科目ともに学生の関心度は高く、出席率も非常に高かった。大きな問題としては「環境問題」そのものは身近な問題であり、それなりに関心もあるのだが、それはあくまでも当事者ではない傍観者の立場から見ているものであったことである。「持続可能な社会」をつくるためには、自分たちひとりひとりが当事者であるという意識を持たなければならない。そのためには学生にとって身近なテーマや話題を用いることが、より効果的な学習を促すことにつながり、それは今回の授業実践で明らかになった。

例えば、2011年度「ESDとサブカルチャー」では、最終課題として「任意の作品を取り上げ、その中に描かれている世界観が「持続可能な社会」を考える上でどのように関係し、作品を鑑賞する学生にその内容をどのようにして伝えることができるか」というものであった。各グループともにアニメから映画まで幅広い作品を取り上げ、それぞれが考える「持続可能な社会」についてのアイデアを共有することができた。この最終報告会のグループワークの中でも特に優秀だったのが、映画『告白』（2010年）を題材として取り上げたグループであった。本作は湊かなえ原作（2008年）で、監督・中島哲也、主演・松たか子で2010年に映画化された作品で、第34回日本アカデミー賞（2011年）を受賞した作品である。作品から見出すことができる世界観には、いじめ問題、AIDS（後天性免疫不全症候群）など複数の社会問題があり、それらがどのように「持続可能な社会」の構築とつながっているか、という点については受講生が問題を自分自身のものとして捉えていた。これは受講生が学習目標を把握し、自分たちで問題を発見し解決しようと努めた結果であると言えよう。

他方、講義を進める上で前提となる基礎知識について、いくつかの問題点が明らかになった。例えば「エネルギー環境教育論」を展開するに当たり、一番大きな問題としては、受講生がエネルギー問題に関する知識がほぼ皆無であったことである。半数の学生は環境問題に関心がある、温暖化問題に関心がある、と話していたが、京都会議（COP3）や京都議定書、温室効果ガス6%削減義務、それに関連する「チーム・マイナス6%」などについて受講生全員が知らなかった。また、受講生の中には理学部地球環境科学科の学生（2年生）もいたが、高校まででは触れる程度しか扱われてきていなかったこと、大学の専門科目でもこのような基礎的な事項についてはほとんど触れられていないことが分かった。

それ以外の問題点としては、受講生がグループワーク形式の授業に慣れていないことが挙げられる。従来の知識伝達型教育に慣れてしまっていて、自分で考える・発言する、ということができない学生が多いということである。事実、履修登録した学生でガイダンスの後、2回目以降に来なくなった学生の理由は「グループワークが苦手だから」「人見知りだから話すのが苦手」という理由が大半であった。

毎年、受講生のほぼ9割が1年生であり、高校まで知識伝授型の講義形式に慣れてきた

受講生の多くは、受講当初はグループワークを中心としたワークショップを取り入れた講義形式に戸惑う。しかし講義の回数が進むにつれ、当該講義の学習目標や学習内容を徐々に理解していくことがリアクションペーパーから伺える。ただし、「これらのキーワードの重要性は分かるが、自分に何ができるのかはわからない（或いは検討してみる）」という消極的な反応や、稲盛氏の環境思想や稲盛氏が行っていることについては「稲盛氏だからできたことで、自分には難しい」、「稲盛氏のように社会的に成功したらやってみたい」、「私には稲盛氏のようにお金がないからできない」という回答が少なからずあったことも事実である。

2011年3月11日に東日本大震災が発生し、多くの被害をもたらした。東日本大震災で改めて注目された「絆」には、稲盛環境思想にある「利他」「共生」につながるところが多分にあり、我々の生活を「足を知る」という点から改めて見直す契機となった。「環境問題」や「持続可能な社会」は身近な問題であると同時に、一人一人が当事者であるという自覚を持たなければならない。今後もグループワークやワークショップなどの体験学習を通じ、受講生が稲盛環境思想のキーワード、「足を知る」「利他」「共生」について自分の問題として取り組むことができるよう、授業開発をしていきたい。

《参考文献》

- 稲盛和夫『稲盛和夫の哲学—人は何のために生きるのか』PHP研究所、2003年。
- 稲盛和夫『生き方—人間として一番大切なこと』サンマーク出版、2004年。
- 稲盛和夫「人は何のために生きるのか」鹿児島大学稲盛アカデミー編『稲盛和夫講義集』鹿児島大学稲盛アカデミー叢書1、2010年。
- 稲盛和夫編『地球文明の危機（環境編）—新たな文明原理をどう構築するのか』東洋経済新報社、2010年。
- 稲盛和夫編『地球文明の危機（倫理編）—新たな倫理をどう構築するか』東洋経済新報社、2010年。
- 梅原猛・稲盛和夫『哲学への回帰—資本主義の新しい精神を求めて』PHP研究所、1995年。
- 梅原猛・稲盛和夫『新しい哲学を語る』PHP研究所、2002年。
- 梅原猛・稲盛和夫『人類を救う哲学』PHP研究所、2008年。
- 奥健一郎「稲盛哲学の可能性」『鹿児島大学稲盛アカデミー研究紀要』2号、2010年、pp.81-104。
- 神田嘉延「進取の精神による実践的人間力の教養教育」『鹿児島大学稲盛アカデミー研究紀要』1号、2009年、pp.65-88。
- 財団法人社会経済生産性本部エネルギー環境教育情報センター編「エネルギー教育ガイドライン」エネルギー環境教育情報センター、2006年。
- 山下宏文「「エネルギー」を中心とする環境教育の確立をめざす」日本エネルギー環境教育学会設立総会パネル討議「これからのエネルギー環境教育への提案」2005年。

-
- ¹ 2009年度は半期開講であったため、科目名は「エネルギー環境教育論」であった。2010年度から前後期開講科目としたため、科目名を「エネルギー環境教育論A／B」に変更した。
 - ² 2009年度の「環境教育・ESD入門」では1月に研修合宿を行い、蘭牟田池の渇水状況の視察を行った。この際、本学産学官連携推進機構（かごしまルネッサンスアカデミー）の元木理寿・特任講師の協力を仰ぎ、蘭牟田池において元木講師による「水と環境と生活」について解説をしていただいた。
 - ³ 近年、大学の授業の中でアニメや漫画などの作品を扱う動きはでてきているが、どちらかというと教材のひとつとして扱うものである場合が多い。サブカルチャーおよびその作品そのものを科目名として全面に押し出したものは少ない。